

ご挨拶

独立行政法人国立女性教育会館女性アーカイブセンターは、男女共同参画社会の形成に顕著な業績を残した女性や女性教育・女性施策等に関する過去の記録の収集・整理・保存・提供に取り組むとともに、さまざまな分野で「チャレンジした女性たち」を紹介する企画展示をシリーズで開催しています。

第4回(平成23年度)の《化学と歩む》からは、「チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」として、現在活躍中の方々も紹介する展示に発展・充実させてきました。

シリーズ6回目となる今回は、初めて芸術分野を取り上げます。《音楽と歩む》と題して、国内外の女性音楽家および音楽関連分野の、パイオニア女性および活躍中の女性たち、それぞれ5名をご紹介しますとともに、各人に関連した肖像画、自筆譜、草稿などを展示しています。

音楽を学び、音楽家の道を切り拓いた女性たちと、現在活躍している女性たち——それぞれの実践の軌跡から、男女共同参画社会の形成をさらに推進するための道すじを見つけていただければ幸いです。

平成25年8月

独立行政法人国立女性教育会館
理事長 内海 房子

歴史的にみる女性音楽家たち

～未知の存在から知る人ぞ知る存在へ～

アーロン・コーエン編『国際女性作曲家事典』で、古今東西のクラシック系女性作曲家たちは少なくとも6,000人の存在が確認されています。しかし「作曲家=男性」と無意識に刷り込まれてはいないでしょうか。

クラシック音楽界では一部の有名男性作曲家が絶対の権威を保っていますが、同等の作品を残した作曲家は男女を問わず無数に存在します。そもそも音楽活動においては演奏と作曲が不可分のものでしたが、分離して作曲家のみが突出するようになるとともに、男性優位が加速していきました。

近代以前、宗教の影響力もきわめて重大でした。使徒パウロが聖堂内で女性に沈黙を強いた禁令は、教会音楽のみならずオペラの舞台にも効力を及ぼし、女性役は去勢された男性歌手(カストラート)が演じるようになります。手造りの楽器が廃れ、大量生産化されるとともに、演奏の場も大音量のコンサート・ホールが主体となり、音楽のあらゆる側面が「強・大・長」という男性原理で覆われていきました。

19世紀以降、最高の教育機関とされたパリ音楽院で正教授であったルイーゼ・ファランクは女性の生徒しか受け持てず、報酬・昇給に影響を及ぼしました。また女性は作曲科にも入学できませんでした。そうした女性の排除規定は文書化されておらず、慣習として受け継がれたようです。1913年に弱冠19歳のリリ・ブランジェが女性として初めて作曲家の登竜門たるローマ大賞を得ていますが、いつから女性も応募できるようになったのかは不明です。他方、クララ・ヴィーク=シューマンやポリヌ・ヴィアルドのように音楽家一族に生まれ、ことさら音楽学校で学ばずとも作曲できた女性もいますが、彼女たちでさえ作品を公にするにはためらいを感じ、サロンのような私的空間での活動を優先させていた例も多いのです。ファニー・メンデルスゾーン=ヘンゼルのように、弟の名を借りて出版したり、架空の男性名を使ったりした女性もいました。

20世紀初頭までは、音楽史の資料や雑誌などに、さまざまな音楽シーンで活躍した女性についての情報が豊かに盛り込まれていました。しかし、自作を演奏する女性が没してその記憶を留める環境が失われ、メディアや学界が男性原理で覆われるとともに、女性たちの実績はなかったかのように見過ごされていきました。それだけに、男性の領域と見做されてきたポジションで奮闘する本展の女性たちにならって、未来を担う若い女性たちも果敢にチャレンジしてくれるよう、エールを送ります。

ルイーズ・ファランク (Louise Dumont-Farrenc)

1804年パリ生まれ。

父方デュモン家も母方コイペル家もヴェルサイユ宮廷に列なる美術の名門一族で、男女を問わず幅広い教養と組織的な訓練を受けるのが当然という気風がありました。幼時よりピアノと理論を学び、15歳からはパリ音楽院で本格的な作曲の個人指導を受けます。

南仏の商家出身のアリステード・ファランクと17歳で結婚。娘ヴィクトリーヌを出産後、オーケストレーションの勉強を再開するや、ソロからオーケストラまで多種の楽器を使いこなした作品群を書き上げます。夫アリステ



ルイジ・ルビオ画「ルイーズ・ファランク」
(1835年) (画像提供: Christin Heitmann)

ードはフルートの演奏家兼教師の職をなげうって、妻の作品を主軸にすえた出版業に専心しました。夫妻はフランス初の鍵盤音楽の歴史的楽譜選集『ピアニストの宝典』の刊行という偉業を達成しました。また娘も加え、バロック音楽の原典主義に基づいたコンサートを開催するなど、家族が一致協力する職人伝統を保ちつつ、時代を先駆ける実績を挙げました。

当時、音楽教育の最高峰とされていたパリ音楽院では、オペラ科を除き、女性はピアノも含め全科の教職から排除されていましたが、ルイーズは院長オベールに請われて19世紀間でただ一人、女性として例外的に正教授に就任。1842年から30年間中断なくその地位に留まりました。しかし、男性教授は男女両性の生徒を受け持てたのに反し、ルイーズが担当できたのは女生徒のみでした。この男女別制度が報酬と昇給にまで影響していることに耐えきれず、1850年に院長に直訴、ほどなく年額格差の是正200フランを勝ち取りました。

また、1861年と1869年の二度にわたり、フランス室内楽に与えられる最高の栄誉シャルチエ賞に輝きます。さまざまな主題を用いた変奏曲や練習曲、性格的小品などの多彩なピアノ作品がありますが、特に《すべての長短調による30の練習曲》は当時パリ、ボローニャ、ブリュッセル等の音楽院ピアノ科の必修教材に指定されました。オペラなどの声楽がもてはやされた時流に抗して、あくまで器楽を主軸としたルイーズはひととき異彩を放つ存在といえます。

1865年、『ピアニストの宝典』編纂の道半ばで急逝した夫に代わり、1872年に一人で全20巻を完成にこぎつけたルイーズは、同年音楽院の職も辞し、3年後の1875年9月、71歳の生涯を閉じました。

ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル (Fanny Mendelssohn-Hensel)

1805年ハンブルク生まれ。

銀行家の父、ピアノと語学に秀でた教養豊かな母のもと、4歳下の弟フェリックスとともに一流のピアニストと作曲家に学びます。姉弟はともに神童の誉れ高く、弟に勝るとも劣らないファニーの楽才は音楽家や文化人らの注目を浴びました。

ファニーは作曲家の姉として弟に助言をし、また1829年の結婚後は妻、母として務めを果たしつつ、音楽活動を続けました。活動の場はベルリンの広大な自宅で催される日曜音楽会でした。1831年頃からその企画運営を担い、指揮者、演奏者として、バッハやベートーヴェンなどのほか、弟の新作の紹介にも努めました。

しかし、上流階級の女性とその一族のプライバシーを護るため、ファニーの作品を上演した時も名は公にされませんでした。弟とは音楽的に切磋琢磨しあう関係でしたが、彼の《歌曲集》作品8と作品9にファニーの作品が含まれているにもかかわらず、そこに彼女の名前はありません。1837年頃、ファニーは自作のピアノ曲11曲を一つの作品として構成し、出版することを考えますが、弟による暗黙の反対もあって実現しませんでした。

ファニーの夫である画家のヴィルヘルム・ヘンゼルは出版に賛成し、妻を励まします。イタリアに旅行し、行く先々で音楽家たちと出会って称賛されたファニーは、作曲家としての自信を深めていきました。クララ・ヴィーク＝シューマンやヨハンナ・キンケルらの優れた女性音楽家たちとの交流などを経て、ついに1846年、弟の意に反して自作の出版を決意します。《6つの歌曲》や《ピアノフォルテのための4つの歌》を相次いで出版し、《ピアノ三重奏曲》などの創作に打ち込みますが、翌年脳卒中に倒れ41年の生涯を終えました。長年の望みであった作品出版は始まってわずか数ヵ月、500曲を超える作品のほとんどが出版されないまま残されました。

出版を鍵として、ファニーは女性、とりわけドイツの上流ユダヤ人の女性の作曲家・音楽家として、複雑に閉ざされた扉を開けました。彼女の名声はイギリスやアメリカにも伝わりましたが、やがて消えていきました。20世紀後半になって再び見出され、その音楽と生涯についての研究、楽譜の出版、演奏や録音が続いています。



画像出典：Wikimedia Commons(PD)

クララ・ヴィーク＝シューマン (Clara Wieck-Schumann)

1819年ライプツィヒ生まれ。

音楽家の両親を持ち、父からピアノのレッスンを受けて9歳でデビュー。10代に入ると、父とともにドイツ国内のみならず、ウィーンやパリへも足を延ばし、ピアニストとしてのキャリアを重ねました。21歳になる前日に、父の反対を押し切って音楽家のローベルト・シューマンと結婚します。

結婚後も活動を続けますが、その道は平坦なものではありませんでした。当時、女性の本分は「妻、母、主婦」にあるとされ、市民階級の女性には社会的に活躍することが強く戒められていました。夫ローベルトはクララ



画像出典：Wikimedia Commons(PD)

の音楽活動を支持していたものの、彼の作曲中にクララがピアノを弾くことはできず、彼女の演奏旅行は家計が逼迫するまで認められませんでした。

ローベルトが精神病院に入院した1854年の秋以降、クララの演奏活動は突然活発化し、国内外を広く回って多くの演奏旅行を行うようになります。夫の入院費を捻出し、7人の子どもを養っていくためではありましたが、一方で職業音楽家として堂々と活躍する大きな背景ともなったのです。

クララの演奏会プログラムの編成は、19世紀のドイツにおける音楽文化の変化がそのまま反映され、おおむね自作を含む同時代の音楽家の作品から成り立っています。1830年代半ば頃から少しずつ変化が現れ、バッハやベートーヴェンなど過去の作曲家の作品が次第に取りあげられるようになります。1840年代には、かつて主流を占めていた技巧的で華やかな作品や自作を演奏することは稀となり、代わって難解とされていたローベルトの作品が増えてきます。指の故障のために自作を演奏できなくなったローベルトにとって、もともとクララは自らの作品の紹介者でした。クララの活動を支えたのは、バッハやベートーヴェンなどのドイツ音楽の「正統」とともに、「ローベルト・シューマンの妻」として彼の作品を伝えるという使命感でした。

1856年のローベルトの死後も活発な演奏活動を継続、60歳を目前にした1878年からはフランクフルトのホッホ音楽院で教鞭をとり、亡くなる4年前の1892年まで後継者の育成にも尽力しました。

幸田 延

1870年、父成延・母猷(ゆう)の長女として、東京の下谷に生まれました。兄に文学者・露伴と探検家・郡司成忠、弟に歴史学者・成友、妹にヴァイオリン奏者・安藤幸(こう)がいます。恵まれた環境のもとで、幼少時から長唄、琴、三味線を習い、1882年に音楽取調掛に入学、ヴァイオリンとピアノを学びます。1885年、音楽取調所第1回全科卒業生でトップの成績をおさめ、その後4年間研究科に在籍しながら助手を務めました。ウィーンから招聘されて来日したR.ディートリヒから専門的な指導を受け、1889年には日本人初の文部省音楽留学生として、ボストンのニュー・イングランド音楽院、続いてウィーン音楽院に入学します。一流の音楽家から本格的な指導を受け、本場の芸術的雰囲気を堪能し、語学を磨き、礼儀作法も学びました。



(写真提供：明治学院大学図書館付属日本近代音楽館、原本所蔵：幸田成貴)

1895年、音楽院を優秀な成績で卒業して6年ぶりに帰国し、熱狂的な歓迎を受けます。『読売新聞』の婦人音楽家の人気投票で洋楽部門の第1位に選ばれるなど、音楽界だけでなく、若い女性や文化人たちにとって、新しい時代を象徴する憧れの女性となったのです。日本人として初めて洋楽を本格的に学んだ経験から、演奏活動だけでなく、母校の教授として、滝廉太郎、久野ひさ、三浦環などの日本の洋楽界を背負っていく人材も育成しました。1897年には日本人による最初の器楽曲《ヴァイオリン・ソナタ ニ短調》を発表しています。

1903年、東京音楽学校は、教師や生徒の技術が音楽学校に相応しい基準に達しているのかを監視する「技術官」という職を作ります。延は最初の技術官に抜擢され、名実ともに音楽界の頂点へ登りつめました。しかしこれが反感や嫉妬を招くもとなり、女性上位・男女学生の風紀問題や音楽学校の腐敗が新聞紙上で論じられ、延は名指しで激しい攻撃にさらされました。「大芸術を婦女子の手にのみ委ねるのは国辱」などと書かれ、ついに1909年9月、2年間の休職を言い渡されます。休職期間中はヨーロッパの音楽界を視察するため渡欧し、復職を信じて、レッスン、コンサート、コンクール、音楽院を精力的に見学しました。しかし帰国後、待っていたのは退職通知でした。

退職後は、上流階級の子弟にピアノを教える教室「審声会」を自宅で開き、1946年に亡くなるまで家庭音楽の普及に努めます。1937年には楽壇初の、また女性初の帝国芸術院会員に推挙されました。自らの人生を日本の音楽教育の発展に捧げ、洋楽界に大きな功績を残した76年の生涯でした。

吉田 隆子

1910年、帝国陸軍の要職にあった父平太郎・母ヤスの次女として、東京の上目黒に生まれました。一家は大邸宅に住み、裕福な暮らしぶりでした。

1927年、日本女子大学付属高等女学校を卒業。進学はせず、アテネ・フランセや南葵音楽文庫に通いつめ、積極的に交友関係を広げて自分の進む道を探していきます。後に「人形劇団プーク」を創立し、その音楽部員が作曲家としての第一歩となりました。橋本国彦の歌曲に感銘を受けて門下生になり、ピアノ曲《カノーネ》などを発表、作曲家としてデビューします。その後エリック・サティに傾倒し、フランス近代音楽を日本に初めて紹介した菅原明朗の下で研鑽を積んでいきました。

大正デモクラシーを過ぎてファシズムの風潮が強くなり、その社会的産物としてプロレタリア音楽同盟 (PM) が誕生します。この運動に共鳴した隆子は、菅原の元を離れ、家族とも絶縁して音楽運動に加わりました。1935年、進歩的な音楽の創造と演奏を目指して「楽団創生」を創設、近代日本作曲家連盟にも加入します。翌年、深井史郎らとともに「音楽新人クラブ」を結成し、評論活動を展開、鋭い評論を積極的に投稿していきます。軍国的・愛国的な内容を歌った作品が量産された時代の中で、はっきりと反戦を唱えた隆子は異彩を放つ存在でした。

1930年代は、私生活においても激動の時代でした。1932年、隆子は画家・三岸好太郎と激しい恋に落ちますが、結局好太郎は家族の元へ帰り、このことがきっかけで、歌曲《鋏》を作曲、PMへの道に進んでいくこととなります。翌年、人形劇団プークの演出家と結婚、そこで初めて貧しさを味わい、やがて離婚を迎えます。そんな時に支えとなったのが劇作家・久保栄で、2人は常識にとらわれない新しい男女関係を構築しようと、生涯法的な婚姻関係を結ばずに20年間生活を共にしました。

1940年に半年間の獄中生活を送った際に大病を患い、急遽出所を許されたものの絶対安静の状態が続きます。戦後、奇跡的に健康を回復した隆子は作曲活動に邁進し、1947年に劇音楽《林檎園日記》と組曲《北国の季節から》を、翌年に組曲《道》を作曲します。そして、4年を費やして完成した《君死にたまふことなかれ》は隆子の代表作となります。さらにこの作品をオペラ化しようと、若き日の与謝野晶子をテーマにした3幕7場の台本を久保と共に書き上げ、作曲にとりかかりますが、完成を見ぬまま1956年3月、癌性腹膜炎のため46歳で没しました。



(出典：辻浩美「作曲家・吉田隆子 書いて、恋して、闊歩して」教育史料出版会)

大谷 康子 ヴァイオリニスト

1955年仙台市生まれ。

3歳でヴァイオリンを始めました。

1964年8歳のときに、全国のスズキ・メソッドで習っている子どもから10人が選ばれて、日米親善のためにアメリカに行って演奏し、将来はプロのヴァイオリニストになりたいと思いました。

東京藝術大学附属音楽高等学校に進学し、在学中の1972年、第26回全日本学生音楽コンクールで全国第1位となりました。

東京藝術大学に入り、1年生のときの新星日本交響楽団(現・東京フィル)、名古屋フィルハーモニー交響楽団でのソリストを皮切りに、在学中も様々な演奏活動を行いました。

さらに大学院に進学をしましたが、演奏活動、附属高校での指導で多忙になり、博士課程は単位取得で終了しました。

1981年、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団からコンサートマスターの誘いを受け、引き受けました。その後1995年に、現在まで続けている東京交響楽団ソロ・コンサートマスターに移籍しました。

様々な事情でコンサートにいけない方たちに演奏を届けることができないかとずっと考え、小児科医の同級生に相談したところ、自分の勤めている病院に演奏に来てくれないかと言われ、訪問しました。患者さんは大変な状況の中、熱心に楽しんで聴いてくださり、改めて「音楽の力」を実感し、忘れられない体験となりました。この貴重な体験が指針となり、全国各地のコンサートの際には、近くの病院・施設・学校などに声をかけて、ボランティア演奏を行っています。

東京藝術大学附属音楽高校講師は、大学院生になったときに恩師からすすめられて始めました。音楽家も社会の一員であり、社会のために何ができるのかということを考えるということを、ボランティア演奏会に連れて行くなどしながら教えています。

2005年から、弦楽四重奏団「クワトロ・ピアチェーリ」の一員として活動しています。この活動では、平成22年度(第65回)「文化庁芸術祭賞」大賞を受賞しました。

現在、これらの活動でやりたいこと、やらなければならないことがたくさんあり、とにかく時間がないことが悩みです。24時間最大限に使うことを日々心がけています。



小林 緑 研究者

1942年5月21日、福島市生まれ。

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業後、同大学院を修了。

1971～72年にフランス政府給費留学生としてパリ第四大学音楽学研究所に留学します。1976年から国立音楽大学で教職に就き、1983年にクラシック・レコード編成者の谷戸基岩(現評論家)と結婚しました。

女性作曲家に開眼したのは、夫が買い集めてくるレコードがきっかけでした。その中に多数の女性作品を見つけ、はるかに知名度の高い男性たちの作品と比べても、全く同等のすばらしいものであることを確信したので

す。以降、「女性と音楽」をライフワークと定め、研究にも授業にもできる限り組み入れました。

1993年に女性と音楽への関心を共通項に、さまざまな形で音楽に携わる人たちが集まる「女性と音楽研究フォーラム」を結成し、代表に就任しました。1999年には、編著書『女性作曲家列伝』(平凡社)を出版するとともに、国立音楽大学在外研究員としてパリに滞在、女性作曲家の情報収集に専心します。

音楽創造力に男女の優劣はないにも関わらず、日本の西洋クラシック音楽界で演奏されるのは一握りの男性作曲家の曲ばかりである現状を解消するためには、実際に女性たちの作品を直接耳で確かめてもらうことが効果的と考え、さまざまなコンサートを企画してきました。2004年から和洋女子大学非常勤講師として女性作曲家の講義とミニ・コンサートを計18回実施し、2007年に夫と共同で「女性作曲家音楽祭2007」全12回のコンサートを実施しました。「津田ホールで聴く女性作曲家」コンサート・シリーズも2012年までに計4回実施しています。また、2008年より、ネット新聞“News for people in Japan”(NPJ)に「クラシック音楽は超男性世界!」の連載を開始するなど、精力的に活動の場を広げています。

2011年3月11日の原子力発電所の事故を経て、それまで以上に音楽—女性—自然(環境)の相関関係を強く意識するようになりました。楽器ではなく声、自然素材のみで作られた古い楽器、楽譜を盲信せず自由な即興も許容する演奏法など、近代社会以前の主流だった音楽の諸要素を自然やエコロジー問題と結び付けて考えることで、毎日の生活が研究と乖離せずどちらにもプラスに働くはずだと思いつき、シンプル・ライフをさらに押し進めています。



徳山 美奈子 作曲家

1958年大阪市生まれ。

ピアノ教師の母は、生まれたときに「この子を音楽家にしよう」と決めたそうです。幼児の頃から絶対音感があり、3歳から聴音とソルフェージュとピアノを始めました。中学2年のとき母が「即興演奏もできるし、この子はピアノよりも作曲に能力がある」と、東京藝術大学附属高校を受験することになり、合格。その後東京藝術大学作曲科に進学します。



東京藝術大学では、学年ごとに楽器1つの曲、歌曲、室内楽といった課題があり、自由に曲を創ります。当時の現代音楽は無調で、化学反応式を解いているような作品ばかりで、自分がどのような作品を創りたいのかということを見失いはじめました。また、作曲を生業にしていける人間は60人に1人いるかいないかというところで、女性が作曲家になるのは無理だという考えの先生方がほとんどでした。その頃に尹伊桑(ユン・イサン)氏の音楽を聴きました。「音から血が流れている、涙が流れている」と感じ、ベルリン芸術大学で教えている尹氏のもとで勉強することを考え始めました。

1982年、ロータリー奨学金を得て留学し、「ドイツの母」ヘルタ・シュタイングローバー氏との出会いがあり、5年間を尹氏のもとベルリンで過ごすことができました。尹氏からは一週間に一曲書いてくるように言われましたが、「新しい音楽などないのでは。私は書けないのでは」と自信を失っていきました。尹氏に「歴史に残る名作はみんな似ている。人の心を打つものは似ているが、ちょっと違う。その『ちょっと違う』ができればいい。自分を信じなさい」と叱咤激励され、作曲を続けることができました。

1987年に帰国、翌年結婚しました。まずはコンクールで賞を取ることから始めるしかない、1990年イタリアのブッキ国際作曲コンクールで入選。1991年に息子が生まれ、育児の手のあく深夜から夜明けの時間を作曲にあて、1992年「福井ハープ音楽賞コンクール」で優秀作曲賞を得ました。1995年「ウィーン国際作曲コンクール」に挑戦し、「Memento Mori(死を想え)」が1位を得ました。報道の中には、作曲中2人目の子どもがお腹にいたこともあり、「お母さん作曲家」という表現があり、それには違和感を覚えました。その後、オーケストラや音楽祭から作品を委嘱され、2006年には「浜松国際ピアノコンクール」の第2次予選課題曲を委嘱されました。このときの作品「Musica Nara」は、内外のピアニストから愛され、数多くとりあげられる曲となりました。

尹氏はいつも「芸術にとって一番強い要素は喜びではなくて悲しみだ、人生の悲しみを重ねるほど作曲家として完成していく」と言っていました。その意味では、作曲家には定年はありません。これからの50代はいろいろなことがあると思いますが、それを乗り越えて曲を書き続けていこうと思っています。

福本 ともみ サントリーホール総支配人

1959年横浜市生まれ。

就職した1980年代初めは、男女雇用機会均等法施行前で、4年制大卒女子学生を採る企業自体が非常に少ない状態でした。サントリーは20代の女性が活き活きと会社説明をしており、ここなら自分なりに納得のいく仕事ができるのではないかと考えて、入社を決めました。

最初の配属は人事部門でした。社内には女性活用の機運があり、常に120%頑張らなければ責任を果たすことができない仕事を与えられ、少しずつハードルを上げながら走っているうちに、7年が経っていました。

そろそろ次のステップをと考え、社内の留学制度に応募して、慶應義塾大学大学院経営管理研究科(ビジネススクール)に入学し、経営学修士(MBA)を取得しました。

修了後は本社広報部で1年半勤務し、1991年サントリーホールの広報担当となりました。音楽は好きでしたが、クラシック音楽はよく聴いていたというわけではなく、当初は知らないことばかりでした。まず、オフの場でコミュニケーションする機会を作るなど、人間的な信頼関係を構築していきました。音楽の世界で仕事を続けたいと思った一番のきっかけは、1993年、「ホール・オペラ」の立ち上げにかかわったことです。「音の良いサントリーホールでぜひオペラを」という指揮者の熱い提案による、オーケストラをステージ上に置き、その周りで歌手が演技するという新形式のオペラです。広報として、演奏家や作り手の思いを多く人に伝え、彼らの創造の過程をサポートすることの醍醐味を実感した経験でした。

サントリーホールで充実した7年を過ごしましたが、今後ホールがどうあるべきか、ホールにどのような役割が期待されているか、本社に身を置いて把握したいという思いがふくらみ、1998年広報部課長として本社に異動しました。その後、お客様コミュニケーション部、コンプライアンス推進部のマネージャーとして仕事をしました。広報部課長をしていた2000年に長男を出産しました。すでに仕事のスタイルがある程度できていたので、それを前提にどういった環境をつくればよいかを考え、体制を作って仕事を続けました。

2008年、副支配人として再びホールに異動、翌年に支配人、2012年に総支配人となりました。ホールのトップは「館長」で、日本を代表するチェリストの堤剛氏が音楽面を中心に全体をみており、私は事務方のトップとして、総勢約260名のスタッフとともにホール運営にあたっています。サントリーホールのミッションは、ホール初代館長の佐治敬三が残した、「etwas Neues」(「常に何か新しいことを」という意味のドイツ語)ですが、一人でも多くの方に音楽の力を届けるため、お客様に喜んでいただくために何かできることはないか考え続けることと受け止め、その思いを持って仕事をしています。



松尾 葉子 指揮者

1953年名古屋市生まれ。

音楽が流れているのが当たり前環境に育ち、小学生になった時ピアノを始めました。楽譜を見て弾くのが早く、将来音楽家になるかもしれないと、聴音やソルフェージュ、楽典も教わりました。

高校は普通科に入学しましたが、オーケストラに興味を持ち、自分でレコードを買い、スコアと見比べていました。

お茶の水女子大学の音楽教育学に進学。大学2年生の時、フランス映画『哀しみの終わるとき』の主題歌レコードを聴き、フランスのシンガーソングライター、ミッシェル・ポルナレフの3分ばかりのこの曲に魅きつけられます。歌詞を理解したいとフランス語の勉強を独学で始め、ドビュッシーやラヴェルなどのフランス音楽に興味を持ちました。お茶の水女子大学音楽科では、学園祭で3年生がオペラを上演することになっていました。ラヴェルの『子供と魔法』をとりあげ、難しかったが編曲も手がけ、指揮をすることになり、このことがきっかけで、指揮者への道を考えるようになりました。

3年生の冬、卒業後東京藝術大学指揮科を受けなおすか迷っている時に、小林研一郎氏に相談してはと助言され、演奏会後の楽屋を訪ね、弟子入りを許されました。その後すぐに同氏はコンクールに優勝、受験前の半年、コンサートの練習につれて行っていただき、指揮者の仕事、練習の仕方などを実地で教わるのができたのは、大変な財産となりました。1975年、東京藝術大学指揮科にただ一人合格します。

学生時代から各地で指揮をし、大学院に進学。群馬交響楽団が初めて募集した音楽教育のための演奏会指揮者のオーディションに受かり、大学院2年生の4月から指揮棒を振り始めました。

1981年大学院を修了、国際ロータリークラブの奨学生として、パリ・エコール・ノルマル音楽院指揮科に留学、1年を過ごします。

1982年9月、フランスのブザンソン国際指揮者コンクールで、女性として史上初の優勝により、一躍注目を集めました。

その後、東京藝術大学の講師として教え始め、さまざまなオーケストラを指揮。1999年からセントラル愛知交響楽団常任指揮者。2000年、能楽堂でのモーツァルト『ドン・ジョバンニ』、人形浄瑠璃を取り入れた『異説・カルメン情話』など、いろいろな試みのプロデュース公演も行っています。

2005年から、東京墨田区にあるすみだトリフォニーホールのジュニア・オーケストラの音楽監督を務めるなど、教育活動にも力を入れています。

